

# チベット訳『宝篋経』一和訳と訳注（4-1）

五 島 清 隆

## 1 はじめに

本稿は、五島 [2013] [2014] [2015] の続編であり、全4巻のうちの第4最終巻の和訳と訳注である（紙幅の関係で今回はその前半のみとなる）。先の第3巻の末はプールナ・マイトラ・ヤニーポトラの回想であるが、そこでは、マンジュシュリーが、ヴァイシャーリーに住むニルグランタ（裸形行者）のサティヤカのもとに自らが化作した五百人とともに赴き弟子として帰依してみせ、時期を見計らってサティヤカの弟子たちに仏陀の教えを説き、その結果、彼らが仏陀への帰依を表明したところで終わっていた。この第4巻はそれを受けて、帰依した異教徒たちがマンジュシュリーとともに仏陀のもとに行くところから始まる。

## 2 和訳と訳注

第4最終巻 (bam po bzhi pa ste tha ma<sup>1)</sup>)

### IX-3 プールナ・マイトラ・ヤニーポトラの回想（3）化作比丘による説法

1) 翻訳の資料として用いたチベット大蔵経（写本：KPhT、版本：CDHNP）及び漢訳大蔵経（Ch1, Ch2）の詳細については、五島[2013]47-48頁の注(1)参照。使用したチベット大蔵経の第4巻の丁数は以下の通り。

C: 321a1-333b7, D: 279a7-290a7, H: 435a5-451b4, K: 224b5-238b8, N: 442b6-460b3,

P: 305b7-316b4, Ph: 293b2-310a2, T: 239b1-254b7.

このうちH（ラサ版）とP（北京版）の丁数のほかに、『中華大蔵経・甘珠爾』（藏文版対勘本、全108冊、2008年）の第51冊の当該部分（727頁10行目～752頁9行目、本文は

「さて、マンジュシュリー法王子は多くの会衆に取り囲まれ、恭敬されて<sup>2)</sup>、<sup>(3)</sup>カレリー樹の前の集会所<sup>(3)</sup>、世尊のおられるところにやって来ました。やって来ると、世尊の両足に頭を付けて [P306a] 礼拝し、〔集会所の〕一角に坐りました。<sup>(4)</sup>ほかに、外道の会衆たち [H435b] も<sup>(4)</sup>〔シャクラ神から供養の品として与えられた〕マンダーラヴァの華を世尊に捧げ、世尊の周りを三回まわって一角に坐りました。

その時、マンジュシュリー法王子の加持力 (\*adhiṣṭhāna) によって化作された彼ら五百人の者たちは世尊にこう申し上げました。『世尊よ、如来は法身なので、私たちは仏陀〔のお姿〕を見たいとは思いません<sup>5)</sup>。世尊よ、教法は言葉で表現できるものではないので、私たちは世尊の教法を聞きたいとは思いません。世尊よ、世尊 [Zh728] の弟子たちによる僧団は<sup>(6)</sup>無為として表示 (顕示) されるもの (\*prabhāvita) なので<sup>(6)</sup>、私たちは僧団を敬したいとは

---

D版の読み、Zhと表記)の頁数を本文に記入した。『中華大蔵経』については五島[2014]46頁注(2)を参照。

- 2) Tib: mdun du bdar. Ch2: 恭敬. *My* 6274 puraskṛtaḥ : mdun du bdar ba'am mdun gyis bltas.
- 3) Tib: smig (D: smyig) ma'i ldum bu'i 'khor gyi khyams ga la ba dang. Ch1: 迦梨羅講堂. この部分はK,T及びCh2には存在しないが、そのような形になっているのは、プールナ・マイトラーヤニープトラの回想がヴァイシャーリーを拠点とする異教徒サティヤカの話であり、前節最後において教化された異教徒にシャクラ神が仏陀に捧げる供養の品としてマンダーラヴァの華を渡しており、その通り、彼らはそれを仏陀に捧げているからである。これに従えば、仏陀はヴァイシャーリーの重閣講堂におられたと考えられる。しかし、以下に述べられる会座から退出した二百比丘のエピソードを見ると、この時仏陀がおられたのはシュラーヴァスティー郊外の祇園精舎であるから、異教徒たちは、羨むことのない天華を持って、ヴァイシャーリーからシュラーヴァスティーまで移動していたと考えべきであろう。
- 4) Tib: gzhan mu stegs can gyi 'khor de dag gis kyang . KT: mu stegs can gyi 'khor gzhan de dag gis kyang (repeated in K). Ch1: 諸外異道及衆弟子. Ch2: 爾時尼乾外道弟子.
- 5) Tib: don du mi gnyer ro (\*na prārthate). Ch1: 不欲(敬)見佛. Ch2: 不爲見佛. 以下、文脈に応じて「～たいとは思いません」「～を望みません」と訳す。
- 6) Tib: 'dus ma byas kyis rab tu (omitted in KT) phye ba ste. Ch1: 無合會行. Ch2: 修無爲故. rab tu phye ba を「表示 (顕示)」と訳すことに関しては五島[2014]48頁注50参照。Cf. *VKN* III-51: 「なぜなら、真如は二として表示 (顕示) されることはなく、多としても表示 (顕示) されることはないからです」 tat kasya hetoḥ. na hi tathatā dvayaprabhāvītā nānātvaprabhāvītā. (Tib: de ci'i phyir zhe na. de bzhin nyid ni gnyis kyis rab tu phye ba ma yin, tha dad pas rab tu phye ba ma yin pa'i phyir te. 玄奘訳: 夫真如者非二所顯, 亦非種種異性所顯.)なお、瑜伽行学派の諸文献における prabhāvita の語義については、Schmithausen [2014] pp. 507-568参照。

思いません。世尊よ、法界は功德も利益(\*anuśaṃsa)もないものなので、私たちは功德を望みません。<sup>(8)</sup>世尊よ、一切の法はまったく生起することがないので、私たちは生起<sup>7)</sup>を望みません。<sup>(8)</sup>世尊よ、解脱は葉・花・果実〔という因果関係〕を離れているので、<sup>(9)</sup>私たちは〔果を〕獲得することを望みません<sup>(9)</sup>。

世尊よ、完全なる理解は〔対立する〕二つを離れているので、私たちは苦を完全に理解することを望みません。世尊よ、<sup>(10)</sup>一切の法はまったく生起することがないので<sup>(10)</sup>、私たちは〔H436a〕集起(\*samudaya 結果を引き起こす因)を断ずることを望みません。世尊よ、一切法は完全に滅しているので、私たちは滅を直証することを望みません。世尊よ、道は有と無とを離れているので、私たちは道を修習することを望みません。

世尊よ、<sup>(11)</sup>一切の法は止まる場合にも〔真に〕止まることはないので<sup>(11)</sup>、私たちは念を止め〔て瞑想す〕ること(四念住)を望みません。世尊よ、解脱は福・非福・不動の行為(\*saṃskāra)を離れているので、〔P306b〕私たちは正しく〔煩惱を〕断ずること(四正断)を望みません。世尊よ、<sup>(12)</sup>どこからも来ることなく、どこにも行くことがないことを行動基準(\*pramāṇa)とするので<sup>(12)</sup>、私たちは神通の基盤(四神足)を望みません。世尊よ、能力(\*indriya)は意義・目的とは無縁なので、私たちは〔悟りへの〕能力(五根)を望みません。世尊よ、一切の法は働き(\*bala)がなく〔Zh729〕脆弱なものなので、私たちは〔悟りへの〕働き(五力)を望みません。世尊よ、ここには、勝義(\*paramārtha 究極的な意味)という点でいかなる悟りもない

7) CDHNPPH: 'byung ba. KT: sdug bsngal 'byung ba.

8) Ch1: 我等不用世尊妙御, 一切諸法永寂無御. Ch2: 世尊, 我等不爲修道. 何以故, 一切諸法究竟道故.

9) Ch1: 我等不用如來土地之義.

10) Ch1: 一切諸法眞無有習. Ch2: 諸法究竟無和合故.

11) Tib: chos thams cad ni gnas na (Ph:nas, KT:su) mi gnas pa ste. Ch1: 一切諸法住無所住. Ch2: 一切諸法離處非處故.

12) Tib: gang nas kyang mchi (Ph:mtho) ba ma (omitted in Ph) mchis pa (KT: par, omitted in Ph), gang du yang mchi ba (omitted in CNP) ma mchis pa (DKT: par, omitted in Ph) tshad mar bgyis te. Ch1: 無猶豫行亦無狐疑, 無往來起生. Ch2: 一切諸法無去來故.

ので、私たちは悟りへの要素（七覚支）を望みません。[H436b] 世尊よ、<sup>(13→)</sup>行くとしても世間の果てまで行くことはないので<sup>(13)</sup>、私たちは道（八正道）を望みません。

世尊よ、寂靜の領域には動揺がないので、私たちは〔動揺を抑止する〕寂靜の境地（\*śamatha 止）を望みません。世尊よ、出世間の智慧はどんな些細なものも見る事がないので、私たちは觀察（\*vipaśyanā 觀）を望みません。<sup>(14→)</sup>世尊よ、そのように〔善法を〕取ることも〔悪法を〕捨てることもまったくないので、私たちは努力を望みません。<sup>(14)</sup> <sup>(15→)</sup>世尊よ、法界を正しく悟る（\*samyaksambuddha）ことはないので、私たちは解脱を望みません。<sup>(15)</sup> 世尊よ、沙門はすべての執着から離れて〔しまって〕いるので、私たちは沙門〔となること〕を望みません。世尊よ、<sup>(16→)</sup>婆羅門はすべての罪惡（\*pāpa）から離れて〔しまって〕いるので<sup>(16)</sup>、私たちは婆羅門〔となること〕を望みません。世尊よ、法の本性（\*dharmaṃprakṛti<sup>(17)</sup>）は分割されないものなので、私たちは〔法を分割する〕比丘になること（\*bhikṣubhāva）を望みません。

世尊よ、このように<sup>(18)</sup>六つの認識領域（六処）は滅するものですから、私たちは彼岸に到ることを望みません。世尊よ、このように壊れるものはどんなに小さいものでも称讚〔に値〕しないので、私たちは欲望の小さい者（少欲）〔など〕ではありません。世尊よ、このようにどんな法も求め〔るに値し〕ないので、私たちは満足する者（\*saṃtuṣṭa 知足）ではありません。<sup>(19→)</sup>世尊よ、

13) Tib: 'gro bas 'jig rten gyi mthar 'gro ba ma mchis te. Ch1: 無數無世亦無求非利。 Ch2: 無有去盡世間邊故。

14) Ch1: 我等亦不求識義。 Ch2: 世尊，我等不爲三明。何以故，彼所(此)明處畢竟無故。

15) Ch1: 如是爲常有解脫義法界而無縛。 Ch2: 世尊，我等不爲解脫(+)法。何以故，法性無(性法善，法性善)繫故。

16) Ch2: 斷諸形色名婆羅門。

17) Tib: chos kyi rang bzhin. Ch1: 其自然者。 Ch2: 法性。 Asp: 「一切の法は本性として清浄であるから、般若波羅蜜は近づくべきである」 sarvadharmaprakṛtipariśuddhiḥ prajñāpāramitā anugantavyā. (235.10-11) VKN VIII-22: 「仏陀には法があり、僧団はその法を本性としている」 buddhasya hi dharmāḥ, dharmaprakṛtikaś ca saṃghaḥ.

18) Tib: 'di ltar. 「このように」と直訳しておくが、漢訳では該当箇所 Ch1: 如也、Ch2: 何以故とあるので、理由を表す語 (yatas, yasmāt) の訳語と考えられる。

19) Ch1: 於言亦無言。如也，無有身無意無説。 Ch2: 世尊，我等不爲寂靜。何以故，身心無失故。

このように身体と心は〔言葉で〕表現できないので、私たちは遠離する者 (\*vivikta) ではありません。<sup>(19)</sup> [H437a] [P307a] 世尊よ、<sup>(20)</sup>このように〔有情は〕三界には [Zh730] 住しないので<sup>(20)</sup>、私たちは無漏の者<sup>(21)</sup>ではありません。世尊よ、このように〔対立する〕二つ〔のもの〕を見る (\*samānu√paś) ことはないので、<sup>(22)</sup>私たちは混合しないもの (\*avyāmiśra) ではありません<sup>(22)</sup>。世尊よ、このように三界のすべては地獄の住人にとっての阿蘭若 (\*araṇya 荒野) なので、私たちは阿蘭若 (\*araṇya 人里から離れた比丘たちの修行の場) を望みません。<sup>(23)</sup>世尊よ、このように相手 (\*pratipakṣa) が存在しない以上、論争 (\*vivāda) は存在しないので、私たちは論争のない者 (\*araṇāvihārin 無諍) ではありません。<sup>(23)</sup>世尊よ、このように鉢に受けた食物 (\*piṇḍapāta) への想いは捨てているので、私たちは托鉢に依る者 (\*piṇḍapātika) ではありません。世尊よ、<sup>(24)</sup>このように真実には輪廻を見ることはないので<sup>(24)</sup>、私たちは輪廻を怖れません。世尊よ、このように構想すること (\*kalpanā) もなく分別すること (\*vikalpa) もないので、私たちは貪り・怒り・愚かさを捨てることをしません。世尊よ、このように諸法の本性として煩惱は存在しないので、私たちは煩惱を断つことに努力しません。世尊よ、このように自らの身体は身体ではないので、<sup>(25)</sup>私たちは自らの身体か

20) Tib: 'di ltar khams gsum du mi gnas pa ste. Ch1: 如是三界皆平等. Ch2: 不與三界共住止故.

21) Tib: zag pa med pa. Ch1: 無住. Ch2: 知識.

22) Tib: bdag cag ma 'dres pa ma lags so. Ch1: 吾等亦非無所習. Ch2: 我等不近親友. Cf. *DBh*: 「たとえば、仏子たちよ、汚れかつ清浄な世界と純一に清浄な世界との二つの世界の境界は偉大な神通力に依らない限り超越しがたいように、仏子たちよ、〔汚れと清浄とが〕混合した菩薩行と純一に清浄な菩薩行との境界は超越しがたく、偉大な誓願・方便・智慧・神通力に依らない限り、あるべきように超越することはできない」 tadyathāpi nāma bho jinaputrā dvayor lokadhātvoḥ samkṛiṣṭaviśuddhāyās ca lokadhātor ekāntapariśuddhāyās ca lokadhātor lokāntarikā duratikramānyatra mahato 'bhij-nābalādhānāt, evam eva bho jinaputrā vyāmiśrapariśuddhā bodhisattvacaryāntarikā duratikramā na śakyā yathā tathātikramitum anyatra mahāprañidhānopāyaprajñābhijñābalādhānāt. (118.11-14) (下線部を vyāmiśrapariśuddhabodhisattvacaryāntarikā と読む。)

23) Ch1: 吾等亦不行空亦無所行. 如也, 所學(譽)爲者亦空.

24) Tib: 'dī (KT: de) ltar 'khor ba nyid yang dag par (omitted in K) na mi mthong ste. Ch1: 審諦平等見. Ch2: 不見實故.

25) Tib: bdag cag rang gi lus las (KT: la) mi g'yo bar bgyi'o. Ch1: 我等亦無有身亦無所出.

ら離れ出ることにはしません<sup>25)</sup>。世尊よ、このように [H437b] 如性 (\*tathatā 真如) は不動をその特徴としているので、<sup>(26)</sup> 私たちは見解をもつ (\*drṣṭikṛta) ことを [も] 不動と考えます<sup>26)</sup>。世尊よ、このように解脱は常・楽・我・淨を本質 (\*svabhāva) としているので、私たちは顛倒 [した見解] (\*viparyāsa 四顛倒) を捨てることはしません。世尊よ、このように此岸から彼岸を観察することはないので、私たちは [輪廻の] 激流 (\*ogha 四暴流) を渡ることはしません。世尊よ、このように解脱は覆われることもなく分別されることもないので、私たちは覆い (\*nīvaraṇa 五蓋) を捨てることは [Zh731] しません。世尊よ、このように真実の極点 (\*bhūtakoti 實際) は纏わりつくもの (\*par-yavasthāna 纏) ではないので、私たちは纏わりつくもの (八纏) を超え出ること (\*vikrānti) はしません。世尊よ、<sup>(27)</sup> このように沙門は罪過 (\*āpatti) がないので<sup>27)</sup>、[P307b] 私たちは後悔 [の念] (\*kaukṛtya 悔) を除くことはしません。世尊よ、このように最初から (\*āditas) 信解し確信しているので、私たちは疑念 (\*vicikitsā) を捨てることはしません。世尊よ、このように信解によって解脱を理解するので、<sup>(28)</sup> 私たちは懷疑 (\*kāṅkṣā) を除くことはしません<sup>28)</sup>。世尊よ、このように一切の法は完全に涅槃している (\*atiparinirvṛta) ので、私たちは完全な涅槃 (\*parinirvāṇa) を望みません』

#### IX-4 プールナ・マイトラヤニーポトラの回想 (4) 二百比丘の退出<sup>29)</sup>

この教説が説かれた時、二百の比丘たちは執着が [H438a] なくなり (\*anupādāya)、その心は煩惱 (漏) から自由になりました (\*āsravebhyaś cittāni vimuktāni)。四禪を得、最後身であり、<sup>(30)</sup> 『未だ得ていないものを得た』<sup>30)</sup> 』と思いがっている二百人の比丘たちは座より立ち上がり<sup>30)</sup>、『ああ、こ

Ch2: 我等不出我見。

26) Tib: bdag cag lta bas bgyis pa mi bskyod par bgyi'o. Ch1: 吾等亦不觀(+諸)往見亦無。Ch2: 我等不淨諸見。

27) Tib: 'di ltar dge sbyong ni nongs pa ma mchis pa ste. Ch1: 亦不疑於寂志。Ch2: 不悔眞諦名爲沙門。

28) Tib: bdag cag nem nur sel bar mi bgyid do. Ch1: 亦不欲斷言説。Ch2: 我等不拔憂箭。

29) 増上慢の比丘が会座から退出するエピソードは『法華經』の「五千比丘起去」を始めとして大乘經典にいくつか見られる。詳細は五島[1986]参照。

30) Cf. SP ch.2: 「[世尊の究極的な教えを説く決意を聞くや、思い上がった (ābhimānika)

これらの人たちは、世間のすべてと矛盾した法を説いている。以前、我々は、世間に随順して法が説かれるのを聞いたが、今は法でも律でもなく、教主(\*sāstr)の説でもないものが説かれている』と言い放って去って行きました。

具寿(\*āyusmat)シャーリプトラよ、私はマンジュシュリー法王子にこう言いました。『マンジュシュリーよ、これら二百人の比丘たちは座から立ち上がり、説かれたこの法は世間のすべてと矛盾している、と言い放って去って行きました』

マンジュシュリーが言いました。『大徳(\*bhadanta)プールナよ、この説かれた法は世間のすべてと矛盾しているのです。なぜなら、大徳プールナよ、世間〔の人々〕は<sup>(31)</sup>〔五〕蘊・〔Zh732〕〔十八〕界・〔十二〕処<sup>(31)</sup>に執着して、輪廻を捨てることで涅槃を〔得ようと〕求めており、輪廻を実体のあるものとして見ないことが涅槃に他ならないという風には理解していないからです。この場合、輪廻する人も涅槃する人もまったく存在しません。そのように〔H438b〕容認(\*kṣānti)することが矛盾のないことなのです。教示された四諦の確立に執着することは矛盾のあり方そのものです。勝義諦(究極的な真実)においては四諦の確立など存在せず、それが矛盾のないことなのです。

〔P308a〕道という因に従うことと〔滅という〕果を得ることとが二であり、二であるものは矛盾なのです。道の平等性故に一切の法が平等であること、これが二のないことであり、およそ二のないものは矛盾しません。我を構想すること(\*ahaṅkāra)、我に属するものを構想することに懸念になる限り慢心(\*abhimāna 増上慢)があり、慢心がある限り、矛盾があります。<sup>(32)</sup>何ものも滅する(下げる)ことなく増やす(上げる)ことなく、<sup>(32)</sup>平等であっても平等とせず、不平等であっても不平等とせず<sup>(32)</sup>、作ることなく変化させるこ

五千人の者たちが] その集会から立ち去ってしまった。というのも、〔彼らは〕思い上がり  
りと不善の行為によって、まだ得ていないものを得たと思い、まだ理解(到達)してい  
ないものを理解(到達)したとと思っていたからである」 tataḥ parśado 'pākramanti sma,  
yathāpīdam abhimānākuśalamūlenāprāpte prāptasamjñīno 'nadhigate 'dhigatasam-  
jñīnaḥ. (38.14-39.1)

31) Ch1: 身五陰四大六入。 Ch2: 陰界諸入。

32) この部分は蔵訳に従った意識であるが、「平等性に等しい(\*samatāsama)ともせず、  
不平等性に等しい(\*asamatāsama)ともしない」とすべきであろう。asamatāsamaを  
蔵訳は、asamatā-asama (mi mnyam pa nyid dang mi mnyam pa) としているが、二つ  
目の否定辞は不要であろう。

とがないこと、それが慢心のないことです。<sup>33)</sup>慢心のないことが矛盾のないことです。矛盾のないこと、それが二のないことなのです。そのことを意図されて世尊は「私は世間と言い争わない。世間が私と言い争うのだ」<sup>34)</sup>とそのように仰ったのです。なぜなら、如来は争いの根を断っているからです。如来が断っている争いの根とは何か言えば、即ち、「これは真実である。これは虚妄（\*mṛṣā）である」<sup>35)</sup> [Zh733] ということです。[H439a] それに関して、世尊はこのように仰っておられます。「バラモンよ、真実という言葉は何か。何故に虚妄だと言うのか。〔そもそも〕平等と不平等がない場合、一体誰が論争を仕掛けたりするだろうか」<sup>36)</sup>と仰っておられるのです』

その時、マンジュシュリー法王子がそれらの〔二百人の〕比丘が通って逃げるその道をすべて火でいっぱいになるように加持（\*adhiṣṭhāna）したので、彼らは行く所行く所どこもすべて火でいっぱいになっているのを見、その火の

33) Tib: gang yang chad par mi byed, lhag par mi byed, mnyam pa nyid dang mnyam par mi byed, mi mnyam pa nyid dang mi mnyam par mi byed cing, byed pa ma yin, rnam par byed pa ma yin pa. Ch1: 設使不有所著非有所作, 亦無等造亦無邪作, 亦不作亦非不作, 亦不樂度亦非不樂度. Ch2: 若不作上亦不作下, 是平等中不作上下, 無作無不作, 若如是者, 名無增上慢.

34) Cf. SN 3.1.5.2: 「比丘たちよ、私は世間と言い争わない。世間が私と言い争うのだ。比丘たちよ、法を論ずる者は世間の誰とも言い争わない」 nāham bhikkhave lokena vivadāmi loko ca mayā vivadati. na bhikkhave dhammavādī kenaci lokasmiṃ vivadati. (vol. 3 138.27-29)

35) Ch1: 是誠信此欺詐. Ch2: 所謂是實是不實是正是邪. Cf. Sn: 「ある人々が『真実である、真理である』と言うその同じことを、他の人々は『虚偽である、虚妄である』と言う。このように彼らは〔それぞれの立場に〕固執して言い争いをする。どうして、沙門たちは同一のことを語らないのであろうか」 yam āhu saccaṃ tathīyan ti eke, tam āhu aññe tucchaṃ musā ti, evam pi viggayha vivādiyanti, kasmā na ekaṃ samaṇā vadanti. (v. 883)

36) Tib: bram ze, bden pa zhes bya ba'i tshig kyang (repeated in Ph) ci (omitted in K). ci'i phyir (K: +zhe) na rdzun (DKPhT: brdzun) pa zhes kyang brjod. gang la mnyam pa dang mi mnyam pa med na, de la su zhig rtsod pa sbyor bar byed. Ch1: 誠諦之語有何言, 欺詐語者爲何說. 其有無平等無偏邪(漏耶), 彼有何言說謂有清淨. Ch2: 婆羅門所言實者於汝意云何. 爲是虚妄非是實耶, 正也邪也. 若是俱無, 汝以何事而得知也. Cf. Sn: 「〔真の〕バラモンたる人がどうして『〔これこそが〕真実だ』と言うだろうか、彼は『〔それは〕虚妄だ』と言って誰と言い争うだろうか。平等とか不平等とかいうことを持たない人が誰に論争を仕掛けたりするだろうか」 saccaṃ ti so brāhmaṇo kiṃ vadeyya, musā ti vā so vivadetha kena, yasmīṃ samaṇ visamaṇ cāpi n'atthi, sa kena vādaṃ paṭisaṃyujeyya. (v. 843)



塊から逃れることは出来ませんでした。彼らは神通力によって上の空間へと逃げ〔ようと〕しましたが、鉄の網によってこの空間内のすべてがすっかり覆われているのを目にしました。下の方を見てみると、大きな水の塊が見えました。<sup>(37→)</sup>方角を見失った彼らは身の毛がよだつほどの(\*romakūpaharṣaṇa)〔恐怖心〕を抱き<sup>(37)</sup>、[P308b] ジェータ太子の森に至る道の方を見てみると、<sup>(38→)</sup>青蓮華(utpala)・赤蓮華(padma)・赤睡蓮(kumuda)・白蓮華(puṇḍarīka)ですっかり覆われており<sup>(38)</sup>、その道を通って多くの人の群れが世尊から法を聞くために行くのが見えました。見てのち、彼らはそこから引き返して、ジェータ太子の森であるアナータピンダダの園林のあるところ、カレーリ樹の前の集会所、世尊のおられるところに[H439b]行きました。行って、世尊の両足に頭を付けて礼拝し、世尊の周りを三回右繞して一角に坐りました。

<sup>(39→)</sup>彼らが一角に坐ると、私(プールナ・マイトラーヤニープトラ)は彼らにこう言いました。<sup>(39)</sup>『具寿たちよ、どこに行っていたのですか。どこから来たのですか』<sup>(40)</sup>

彼らは言いました。『具寿プールナよ、私たちは阿羅漢であり、漏を[Zh734]尽くし、禪定を得ています。神足の究極に到達しています。私たちがこのマンジュシュリー法王子〔が化作した五百人の者たち〕から〔世間に〕随順していない法を説くのを聞いて座から立ち去ったとき、私たちはこの仏国土がすべて火によって満たされているのを見ました。その火の塊を越えることは出来ませんでした。<sup>(41)</sup>私は世尊にお伺い致します。かの漏の尽きた阿羅漢の地とはどういうものですか』

37) Tib: de dag phyogs bsalad cing (KT insert: ba) spu'i khung bu zing (Ph: zin) zhes byed par gyur nas. Ch1: 恐懼衣毛爲豎。Ch2: 不知方所驚怖毛豎。

38) Tib: me tog utpa la dang padma dang ku mu da dang padma dkar pos yog cing. Ch1: 遍布青蓮華白蓮華黃蓮華紅蓮華。Ch2: 以雜蓮華而莊嚴之。TSD yog pa: paryākulīkṛta. AD paryākula: full of, filled with (compound); disorderd confused, excited, bewildered. 藏語 yog の語義については五島[2014a] 49頁注(69) 参照。

39) Ch1: 邪禪問此諸比丘衆。Ch2: 富樓那言、我時即問彼諸比丘。

40) Cf. KP sec. 145: その時、具寿スプーティは、彼ら〔会座から退出し、世尊が化作した二人の化人に説得されて戻って来た五百人の〕比丘たちにこう言った。「具寿たちよ、いったいどこに行っていたのですか。どこから来たのですか」 athāyusmān subhūtiṣ tān bhikṣūn etad avocat. “kva nu khalv āyusmānto gatā[h]. kuto vā āgatāḥ.”

41) Ch2は次の一節を加える：即以神力上昇虚空，復見鐵網籠遮於上下見大火。

それに対して世尊は私にこう仰せになられました。『プールナよ、<sup>(42)</sup>貪り・怒り・愚かさ〔という煩惱〕の火を〔みずから〕熾<sup>おこ</sup>している者が火の塊を越えることはありえない<sup>(42)</sup>。〔邪〕見の網に覆われている者が鉄の網を断ち切ることも、渴愛（\*trṣṇā 激しい欲望）の水に浸かっている者が水の塊を越えることもありえない。なぜなら、プールナよ、このようにこれらの比丘たちは貪り・怒り・愚かさ〔という煩惱〕の火を〔みずから〕熾しており、〔そういう〕彼らが火の〔H440a〕大きな塊を越えることは出来ないからである。彼らは〔邪〕見の網に覆われており、鉄の網を断つことはできない。<sup>(43)</sup>彼らは渴愛の河（\*trṣṇānadi）に浸かっており<sup>(43)</sup>、水の塊を越えることは出来ない。〔P309a〕プールナよ、たとえば、火の塊たるもの、鉄の網たるもの、水の塊たるもの、それらのもの（\*dharma）すべては、どこからもやって来ず、どこにも行かず、そのいずれでもなく（\*anyathā）、マンジュシュリー法王子の加持力によって現れたのである。プールナよ、ちょうどそれと同じように、貪り・怒り・愚かさ、〔邪〕見、輪廻的生存への渴愛（\*bhavatrṣṇā 有愛）というそれらのもの（\*dharma）はどこからもやって来ず、どこにも行かず、そのいずれでもなく、顛倒〔した見解〕に先導された構想（\*kalpa）・〔Zh735〕分別（\*vikalpa）・妄想（\*parikalpa）から、〔真実には〕我（\*ātman）もなく我に属するものもなく執着もないのに、〔それらを〕我やその他のものとして提示すること（\*samāropa 増益）が生じるのである。そのような時には、ヨーガを修することによって散乱した心を専一にする。専一になった心によって止（\*śamatha 寂靜の境地）を完成させる。止を資糧として禅定を生じる。禅定を獲得すれば慢心することなく、執着することがない。禅定によって柔軟（\*karmaṇya 堪能）になった心によって〔H440b〕諸法を觀察し、法は何かその因となり縁となっているのか、と觀察・吟味（\*pratyaवेkṣā 妙觀察）す

42) Tib: gang 'dod chags dang zhe sdang dang gti mug gi me la spyod pas me'i phung po las 'da' ba ni gnas ma yin no. Ch1: 若不自在供事於火欲得度火者，此則不得過。 Ch2: 若有大火能避大火，無有是處。

43) Cf. *DBh* ch. 2: 「〔有情たちは〕輪廻の激流に押し流され、渴愛の河に身を任せ、大奔流の中に〔呑み込まれて〕いる」 saṃsārasroto'nuvāhinas trṣṇānadiprapannā mahāvega-prāptāḥ (Takakusu MS: grastāḥ). (44.1)

るときに、ありのままに観察・吟味するのである。すなわち、無明を縁として諸行があり、行を縁として識があり、識を縁として名色があり、名色を縁として六処があり、六処を縁として触があり、触を縁として受があり、受を縁として渴愛があり、渴愛を縁として取があり、取を縁として有があり、有を縁として生があり、生を縁として老死、憂、悲、苦、愁、悩が生じる。そのようにして、この苦の大きな集合(大苦聚)のみが生じることになる。<sup>(44)</sup>これは間違った活動(\*mithyāpratipatti)を形成する道と言われる。<sup>(44)</sup>

[また、]無明の滅によって諸行が滅し、行の滅によって識が滅し、[P309 b] 識の滅によって名色が滅し、名色の滅によって六処が滅し、六処の滅によって触が滅し、触の滅によって受が滅し、受の [Zh736] 滅によって渴愛が滅し、渴愛の滅によって取が滅し、取の滅によって有が滅し、有の滅によって生が [H441a] 滅し、生の滅によって老死、憂、悲、苦、愁、悩が滅する。そのようにして、この苦の大きな集合(大苦聚)のみが滅することになる。<sup>(45)</sup>これは正しい活動(\*samyakpratipatti)、無為への悟入である。<sup>(45)</sup>その場合、無明〔について言えば、そ〕の滅は過去でもなく未来でもなく現在でもないが、<sup>(46)</sup>非理作意(\*ayoniśomanasikāra 根源的でない不正な思惟)が生じることによって無明が生じるのである<sup>(46)</sup>。それ(無明)は、如理作意(\*yoniśomanasikāra 根源的な正しい思惟)によって観察・吟味すれば生じないであろう。生じないということは、完全に滅しているということである。それ故、無明の滅と言われるのである。その際、如理作意とは、四つの元素(四大種)から生じるこの身体について、たとえば、「この身体は感覚がなく、草・木・壁・石

44) Tib: 'di ni log par bsgrub (P: sgrub, Ph: bsgrubs) pa'i (KT: log pa'i nan tan gyi (T: gyis) 'du byed kyi (Ph: kyis) lam zhes bya'o. Ch1: 是謂從癡得長養身. Ch2: 是名墮邪. Cf. SN 2.1.1.3: 「比丘たちよ、これが間違った修行(道)と言われる」 ayam vuccati bhikkhave micchāpaṭipadā. (vol. 2 4.32)

45) Tib: 'di ni yang dag par sgrub pa 'dus ma byas su nges par 'jug pa'o. Ch1: 爲得平等無爲, 無合會得寂寞. Ch2: 是名正見, 是無爲正位. Cf. SN 2.1.1.3: 「比丘たちよ、これが正しい修行(道)と言われる」 ayam vuccati bhikkhave sammāpaṭipadā ti. (vol. 2 5.4-5)

46) 無明の因を非理作意とする経典、論書は少なくないが、これに関しては光川[1984]が詳しい。経量部と有部による非理作意をめぐる議論については楠本[2007]96-105頁を参照。

の如きものである」<sup>47)</sup>と観察・吟味することである。「<sup>48)</sup>心、あるいは意あるいは識と言われるものは、形体がなく、指示することができず、障害性がなく、知の働きのないものであり、幻、夢の如きものである<sup>48)</sup>。内と外とその両者でないものを〔対象として〕見ることはない」と、そのように如理作意することに努力する比丘は<sup>49)</sup>、一切諸法は本性として不生であると理解する〔H441 b〕であろう。不生ということが勝義 (\*paramārtha) なのである』

この教説が語られた時、彼ら二百の比丘たちは、執着がなくなり、その心は諸々の煩惱 (漏) から自由になったのです<sup>50)</sup>

## X 裸形行者サティヤカと遊行者ジャヤマト

さて、サティヤカ・ニルグランティーブトラ (\*Satyaka Nirgranthīputra 裸形行者の女性の息子であるサティヤカ) は、<sup>51)</sup>その会衆〔の数〕が減ってしまい、五百人ほどの取り巻き (眷属) [Zh737] とともに意気消沈した状態で<sup>51)</sup>、ジェータ太子の森であるアナータピンダダの園林のあるところ、〔P310a〕カレリー樹の前の集会所、世尊のおられるところに行った。行って、<sup>52)</sup>世尊と挨拶を交わしてのち<sup>52)</sup>、世尊に対してこう申し上げた。「ああ、ガ

47) Cf. VKN II-11: 「この身体は草・木切れ・壁・土塊・幻影に似て感覚がない」 jaḍo 'yaṃ kāyas tṛṇakāṣṭhakuḍyaloṣṭapratibhāsadṛṣaḥ. 羅什訳：是身無知，如草木瓦礫。

48) Tib: gang sems sam yid dam rnam par shes pa zhes bya ba de'ang gzugs med pa, bstan du med pa, thogs pa med pa, rnam par mi rig pa, sgyu ma dang rmi lam lta bu ste. 『大樹緊那羅王所問經』の一節には、本經の前注の箇所と下線部を施した部分とが連続してまったく同じ形が見られる (DKP 67.8-11)。羅什訳：身癡無知，如草木瓦石。心無形色，不可親見，無有觸礙，不可宣說，猶如幻化。(Taisho vol.15 371c27-28) この身心に関する一連の表現は、『大樹緊那羅王所問經』では「音声 (\*śabda) とは、身体や心からではなく、有情の如理作意から生じるものである」という文脈の中で用いられている。

49) Tib: dge slong gis (omitted in Ph, CDNP: gi).

50) 村上[1994]も指摘しているように (237頁)、プールナ・マイトラヤニブトラの回想はここで終わる。ヴァイシャーリーで六万人もの弟子たち (IX-1節) を率いていたサティヤカであるが、そのうち八千五百人がマンジュシュリーに教化され (IX-2節)、彼はその抗議のためにシュラーヴァスティーの祇園精舎までやって来たのである。

51) Tib: 'khor dmas (Ph: dma) par gyur te, g'yog (Ph: g'yogs, KT: 'khor) lnga brgya zhid dang spa gong (C: bkong) bar gyur cing (P: cig). Ch1: 失(共)其衆弟子，與五百眷屬俱。Ch2: 失諸徒衆愁憂不悅。 Cf. Mvy 7271 avasādam āpadyate: spa gong ba'am yid bsad par 'gyur.

52) Tib: bcom ldan 'das dang lhan cig (P: +tu) kun dga' ba dang (KT: mngon sum du,

ウタマよ、『沙門ガウタマは、他人の会衆を連れ去る<sup>53)</sup>幻術によって連れ去る』<sup>54)</sup>と何回も聞いていましたが、それを今、目の当たりにしました。このように、マンジュシュリー法王子は私の会衆を分断して沙門ガウタマの所に連れて来ました。沙門ガウタマもまた、邪悪なもの(鬼霊)に取り憑かれています。彼らはもはや私のもとに戻っては来ません。[私を]尊敬することもしません。<sup>55)</sup>耳を傾けて聞くこともしません。よく理解しようという心を整えることもしません<sup>55)</sup>」

その時、遊行者(\*parivrājaka) ジャヤマティ(\*Jayamati 勝志)がその集会にいた。<sup>56)</sup>〔彼は〕遊行者「月をもつ(月に照らされる)者」の一族(\*sālohitā)である。<sup>56)</sup> <sup>57)</sup>そこにいた彼は、サティヤカ・ニルグランティ

N: dga' bo dang mgu bar 'gyur ba (P: gyur pa) dang dga' bar 'gyur ba'i gtam sna tshogs byas nas. Ch1: 與世尊揖讓談語。Ch2: 共相問訊。藏訳は文字通りには「世尊とともに、喜びに満ちた(面と向かって)、楽しくなごむような種々の話をしてのち」の意。Cf. SN 4.10.10: atha kho vacchagotto paribbājako yena bhagavā ten'upasaṅkami. upasaṅkamitvā bhagavatā saddhiṃ sammodi. sammodaniyaṃ kathaṃ sārāṇiyaṃ vitisāretvā ekam antaṃ nisīdi. (vol.4 400.10-13)

53) Tib: kha 'dren pa (\*apakarṣati). Ch1: 轉。Ch2: 奪。

54) Cf. 『増一阿含経』「善惡品第47」: 王(プラセーナジット王)は仏に申し上げた。「ニルグランタが私のところに来て『沙門ゴータマは幻術をよく知り、それで世間の人を変えてしまおう』と言いました。世尊よ、この言葉は本当ですか、間違いですか? 仏は王に言う。『その通りです、大王よ、その言葉の通り私には幻術がありそれで世間の人を変えることができるのです』王復白佛言。「尼捷(健)子來語我言、『沙門瞿曇知於幻術能迴轉世人』世尊、此語爲審乎、爲非耶? 佛告王曰、「如是大王、如向來言、我有幻法能迴轉世人」(Taisho vol. 2 781b6-10) 下線部はシュラーヴァスティーにおいて多くの異教徒(裸形行者)が仏教に転向したことを示す言葉である。後に続く仏陀の言葉によれば、「迴轉」とは罪を犯した者が布施などによって福德者になることであり、「幻術」とはそれを可能にする仏陀の教えのことである。

55) Tib: rna blags te mi nyan, kun shes par bya ba'i sems nye bar mi 'jog go. Ch1: 不用吾語言亦不受命著心。Ch2: 不受我教聽用在意。この言葉は前巻 IX-1節におけるプールナ・マイトラーヤニープトラの言葉とほぼ同じである: 「彼らは、私が説く法を、聞きたいと思うこと(\*suśrūṣākāra)なく、耳を傾けて(\*avahitaśrotra)聞くこともなく、よく理解すべきだとの心をもつ様子もみせず、私をからかい、嘲笑し、ひどい言葉を口にしたのです」Cf. SN 2.1.9.7: 「(未來世において比丘たちは如来所説の経が語られても)よく聞こうともしないし、耳を傾けることもしないし、知ろうという心を起こさないでしょう」na sussusissanti na soṭaṃ odahissanti na aññācittaṃ upaṭṭhāpessanti. (vol. 2 267. 8-9) この肯定的表現が初転法輪における五比丘の描写に見られる(Vin I. 6.16, vol. 1 10.8-9)。

56) Tib: kun tu rgyu zla ba can zhes bya ba'i snag (P: gnag) gi (Ph: gis) gnyen mtshams. 2 漢訳はこの部分を欠く。

プトラにこう言った。<sup>57)</sup>「サティヤカ・[H442a] ニルグランティープトラよ、世尊や世尊の弟子たち、マンジュシュリー法王子に不信を抱いてはいけません。君は、きっと、長い間にわたって利もなく、益もなく、苦しみ、悪道に落ちることになるからです。ニルグランタよ、次のように、<sup>58)</sup>私には比喩による話がひらきました<sup>58)</sup>。ニルグランタよ、たとえば、ある生まれつき愚かで頭の良くない男が、<sup>59)</sup>醍醐 (\*sarpirmaṇḍa) を欲して、〔その前に出来る〕熟酥 (\*sarpis バターオイル) を求めた<sup>59)</sup>としよう。彼は<sup>60)</sup>水を瓶の中に注いで攪拌し、<sup>61)</sup>どんなに無意味と中断を [Zh738] 経験したとしても<sup>61)</sup>、結果として、熟酥や醍醐は手に入らないであろう。ニルグランタよ、ちょうどそのように、<sup>62)</sup>これ (仏陀の教え) 以外のあらゆる異学の者 (\*pāśāṇḍa)<sup>62)</sup>たちのヨーガ (瞑想)、修習、苦行 (\*tapas)、誓戒 (\*vrata) は、すべて間違っ理解したものです。彼らのことを、水の〔満たされた〕瓶を攪拌したようなものであると私は言うのですが、それだけでなく、〔彼らは〕如来が語られた法と律とに対して [P310b] <sup>63)</sup>害意を抱き<sup>63)</sup>、地獄の深坑に落ちることになるでし

57) Ch1: 是薩遮尼捷親厚，於(+中)道中謂尼捷子言． Ch2: 是勝志外道以親厚意語薩遮言．

58) Tib: ngas dpe bya bar spobs so. Ch1: 今欲説譬喩． Ch2: 聽我說喩以明斯義． Cf. *Asp* 106.30-31: 「世尊よ、私にひらめくものがあります。スガタよ、私に比喩による話がひらめきます。たとえば、……」 pratibhāti me bhagavan, pratibhāti me sugata aupamyodāharaṇam. tadyathāpi nāma ....

59) Tib: mar gyi snying (D: nying) khu (K: ku) 'dod cing (KT: la) mar 'tshol la (KT: ba, Ph: lo). Ch1: 欲得醍醐行求酥． Ch2: 欲求索酥． パーリ聖典に見られる、次の一節が参考になる。「それは例えば、比丘らよ、牛から生乳 khīra が、khīra から dadhi が、dadhi から navanīta が、navanīta から sappi が、sappi から sappi-maṇḍa が[生じる]、それらの中で sappi-maṇḍa が最上と言われる」ここでいう sappi-maṇḍa (Skt. sarpirmaṇḍa) が「醍醐」に相当すると考えられる。出典など、詳細については平田[2014]178頁参照。なお、上記該当箇所の漢訳例として『長阿含經』をあげておく。「布吒婆樓經」第九：譬如牛乳。乳變爲酪，酪爲生酥(蘇)，生酥爲熟\*酥，熟\*酥爲醍醐。醍醐爲第一。(Taisho vol. 1 112b1-5) 同じ表現が『大乘涅槃經』にも見られる (Taisho vol. 12 449a6-8)。

60) Ch2は以下の一節を加える：持瓶往趣恒河，取水至於異處。

61) Tib: ji (Ph: ci) tsam na don med pa dang chad pa'i skal ba (Ph: bskal pa) can du gyur kyang. Ch1: 終竟疲勞厭極． Ch2: 甚大疲苦． *Mvy* 6581 bhāgino bhavanti: skal ba can du 'gyur.

62) Tib: 'di las phyi rol gyi ya mtshan can (omitted in CNP). Ch1: 諸異外道． Ch2: 汝諸外道． Cf. *Thag*: 「これ (仏陀の教え) 以外の異学の者たちは〔間違っ〕見解に依存している」 ito bahiddhā pāśāṇḍa ditthiyo upanissitā. (Therī v. 184ab)

63) Tib: sems gdug (Ph: gdugs) par (CHNPPH: pa) byas pas. Ch1: 不奉． Ch2: 起瞋恚．

よう。ニルグラタよ、たとえば、ある、生まれつき知恵があり頭の良い男が、醍醐を欲して熟酥を求め、<sup>64</sup>牛乳を瓶の〔H442b〕中に注いで攪拌したとしましょう<sup>64</sup>。彼は、わずかな労苦で、生酥 (navanīta 精製されたバター<sup>65</sup>) が得られるでしょう。生酥から熟酥 (\*sarpis) を、熟酥から醍醐 (\*sarpirmaṇḍa) を得るでしょう。ニルグラタよ、ちょうどそのように、在家であれ出家であれ、如来が語られた、この法と律とに対して確信 (\*śraddhā) を持ち、<sup>66</sup>多くの信解 (\*adhimukti 志願・傾倒)<sup>66</sup>によって修行し、努力し、勤めれば、熟酥を望んでいた人が牛乳の〔満たされた〕瓶から〔望み以上の〕醍醐が得られるように、彼らは速やかに聖なる解脱を得るのです。ニルグラタよ、たとえば、ある人が、別の人<sup>67</sup>の、百・千もの粘土で出来た器を壊した<sup>68</sup>としましょう。<sup>69</sup>〔その時、彼が〕それに相当する〔補償として〕宝石で出来た器を与えたとしたら<sup>69</sup>、ニルグラタよ、それをどう思いますか。〔与えた〕その人は相手の人を騙したことになりますか」

〔サティヤカが〕言う。「ジャヤマティよ、そんなことはありません」

〔ジャヤマティが〕言う。「ちょうどそのように、粘土で出来た器のごとき

64) 注(59)で示した生成系列において、実際に攪拌するのは、牛乳が自然発酵してできる凝乳 (\*dadhi 酪) か、牛乳に凝乳を混ぜたものである。Tib が「牛乳 ('o ma \*kṣīra)」とするところを、Ch1は「乳酪」、Ch2は「純好乳」としているのはこのことを示しているのであろう。この dadhi は、『実利論』の記述によれば「斑点のある」(KA 2.12.5)「酸味のある液状の食品」(KA 2.15.19)であり「純銀の色をしたもの」(KA 2.13.14)である。自然発酵については以下の記述が参考になる。『大乘涅槃経』:「世尊よ、牛乳は何らの助けもかりずに必ず凝乳になりますが、〔精製された〕バターはそうではありません。必ず何らかの条件、たとえば人の努力、水瓶、攪拌に使う縄などが必要です」世尊、如乳不仮縁必当成酪，生蘇不爾。要待因縁，所謂人功水瓶鑽繩。(Taisho vol. 12 522b28-523a1)

65) Tib: mar sar (T: gsar). 本経や先に指摘した『長阿含経』『大乘涅槃経』では、この navanīta から sarpis (生酥) が出来るとしているが、『ミリンダ王の問い』などでは、dadhi → navanīta → ghr̥ta の生成系列を挙げている (Mil 40.32-41.5)。この ghr̥ta (Eng.ghee) も sarpis と同じくバターオイルの一種と考えられる。ただし、前者は宗教儀礼、医療、調理のほか、灯明にも用いられるのに対して、後者は主に飲用として用いられる。文献にしたがう限り、醍醐の材料とされるのは後者の sarpis の方である。

66) Tib: mos pa mang ba. Ch2: 多有解向。Cf. *Bbh*: 「菩薩はどのように多くの信解をもつのか」katham ca bodhisattvo 'dhimuktibahulo bhavati. (95.12)

67) Tib: skyes bu gnyis pa. 文字通りには「第二の人」の意。

68) Tib: bcag (DHKT: bzhag). Ch1: 破壊。Ch2: 破。

69) Tib: de snyed (CHNP: nyid) kyi (omitted in Ph, K: kyis) rin po che'i snod byin na. Ch1: 便以寶器還償其主。Ch2: 以好寶器而用償之。

異教徒 (\*tirthika) の弟子たち〔の思想・行動規則〕を壊して、〔彼らを〕如来の教えに〔相応しい〕法宝の器<sup>70)</sup>に変えたとしても、それは異教徒たち [Zh739] を一人といえども騙したことにはなりません。ニルグランタよ、たとえば、自信だけは過剰にあるが方便(様々なことに対応できる具体的な知識)には長けていない隊商の長が多くの旅人を間違った道に導いてしまっても、道に関する知識も経験もある [H443a] 方便に長けた隊商の長が〔旅人たちを〕その間違った道から引き戻して正しい道へと導くようなものです。ニルグランタよ、<sup>(71)</sup>君の六人の指導者 (\*śāstr) はすべて、道を知らず道に通じておらず、それゆえ、君たち多くの人々を間違った道へと導いています<sup>(71)</sup>。〔それに対して〕如来は道を知り道に通じておられ、それゆえ、それらの人々(有情)をその間違った道から引き戻して [P311a] 正しい道へと導きます。とは言うものの、ニルグランタよ、〔君は〕君のこれらの会衆を連れて行きなさい」

その時、一万二千のニルグランタ(裸形行者)たちは、サティヤカ・ニルグランティープトラとともに立ち去って行った。残りの者たちは神通を獲得し、<sup>(72)</sup>世尊に「来なさい、比丘よ (\*ehi bhikṣu)」と言われて出家したのだった<sup>(72)</sup>。

(以下、次号に続く)

〔略号〕

AD *The Practical Sanskrit-English Dictionary*, by Prin. Vaman Shivaram Apte, Revized & Enlarged Edition, Kyoto, 1978 (臨川書店).

70) Tib: snod (\*pātra, bhājana). 器 (pātra, bhājana) には「～に相応しい(人)」という意味があり、ここでもその意が含意されている。本経 II-1節「器と非器」(五島[2013]31-33頁) 参照。

71) Tib: khyed kyi (Ph: kyiis) ston pa drug po thams cad kyang lam mi shes pa lam mi mkhas pa ste, des khyed cag sems can mang po rnams (omitted in T) lam ngan (P: la mngon) par btsud do. Ch1: 卿等諸師以於邪徑不了道義, 將無數人墮於惡道. Ch2: 汝等如彼自稱爲師是不知道者, 不善道者, 不見道者, 不能說道. 是故汝等引導衆生趣於非道. 「六人の指導者」はいわゆる「六師外道」のことか。漢訳は、下線部にあるように、ともに「君たち」を「(諸)師」と見ている。

72) Tib: de dag bcom ldan 'das kyiis dge slong tshur shog ces bya bas rab tu byung bar gyur to. Ch1: 世尊悉下鬚髮爲比丘也. Ch2: 佛即告言「善來比丘」。皆成沙門. “ehi bhikṣu (Pāli: ehi bhikkhu, 善來比丘)” は、初転法輪の時、世尊が五比丘にこう呼びかけて弟子とした (Vin I. 6.32 vol.1 12.23-26) とされる言葉で、この表現を用いることによって、仏弟子として正式に具足戒を授かったことを示している。



- Asp *Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā*, Edited by P. L. Vaidya, Buddhist Sanskrit Texts (BST) No. 4, Darbhanga, 1960.
- BBh *Bodhisattvabhūmi : a statement of whole course of the Bodhisattva (being fifteenth section of Yogācārabhūmi)*, edited by Unrai Wogihara, Tokyo, Sankibo Buddhist Book Store, 1971 (reprint).
- DBh *Daśabhūmiśvaro nāma Mahāyānasūtram*, ed. by Ryūkō Kondō, Tokyo, 1936; reprint 1983.
- DKP *Dnuma-kinnara-rāja-ṣaṣṭhā-sūtra, a critical edition of the Tibetan text (recension A) based on eight editions of the Kanjur and the Dunhuang*, International Institute for Buddhist Studies, Tokyo, 1992 .
- KA *The Kauṭīliya Arthaśāstra Part I Sanskrit Text with a Glossary*, by R. P. Kangle, Delhi.
- KP *Kāśyapaśarīrvara*, A. von Staël-Holstein (ed.), Shanghai, 1934; *The Kāśyapaśarīrvara Romanized Text and Facsimiles*, M. I. Vorobyova-Desyatovskaya (ed.), Tokyo, 2002.
- Mil *Milindapañho, being Dialogues between King Milinda and the Buddhist Sage Nāgasena*, ed. by V. Trenckner, London, 1880 ; reprint Royal Asiatic Society, London, 1928.
- Mvy *Mahāvīyūtpatti* : 『梵藏漢和四譯對校・翻譯名義大集』鈴木学術財団、1916。
- Sn *Suttanipāta*, edited by D. Andersen, H. Smith, PTS., London, 1913.
- SN *Samyutta-Nikāya*, 5 vols, PTS., London, 1884-1898.
- SP *Saddharmaṣuṇḍarīkasūtra*, Kern and Nanjio (eds.), St.Petersburg, 1912.
- Thag *Thera- and Therī-gāthā*, PTS., London, 1883.
- TSD *Tibetan Sanskrit Dictionary*, ed. by Lokesh Chandra, New delhi, 1959; 臨川書店, 1982.
- Vin *Vinayapiaka*, edited by H. Oldenberg, 5 vols., PTS., London, 1879-1883.
- VKN *Vimalakīrtinirdeśa, Transliterated Sanskrit Text Collated with Tibetan and Chinese Translations*, edited by Study Group on Buddhist Sanskrit Literature, The Institute for Comprehensive Studies of Buddhism, Taisho University, 2004.

〔参考文献〕

- 楠本信道[2007] : 『『俱舍論』における世親の縁起観』平楽寺書店。
- 五島清隆[1986] : 「提婆達多伝承と大乘経典」『仏教史学研究』#28(2) 51-69頁。
- [2013] : 「チベット訳『宝篋経』一和訳と訳注(1)」『佛教大学 仏教学部論集』#97、29-56頁。
- [2014] : 「チベット訳『宝篋経』一和訳と訳注(2)」『佛教大学 仏教学部論集』#98、27-54頁。

- [2015]:「チベット訳『宝篋経』—和訳と訳注(3)」『佛教大学 仏教学部論集』#99、29-54頁。
- 平田昌弘[2014]:「古・中期インド・アールア文献「Veda 文献」「Pāli 聖典」に基づいた南アジアの古代乳製品の再現と同定」(平田昌弘、板垣希美、内田健治、花田正明、河合正人による共同研究)『日本畜産學會報』#84(2)、2014年、175-190頁。
- 光川豊藝[1984]:「大乘仏典にみられる十二縁起—とくに十二縁起の大乗的解釈をめぐって—」『仏教学研究』#39・40、19-49頁。
- 村上真完[1994]:「国訳・大方広宝篋経」『新国訳大蔵経 文殊經典部1 阿闍世王経・文殊師利問経他』大蔵出版、171-248頁。
- Schmithausen, Lambert[2014]: *The genesis of Yogācāra-Vijñānavāda: Responses and Reflections*, The International Institute for Buddhist Studies of the International College for Postgraduate Buddhist Studies, Tokyo.